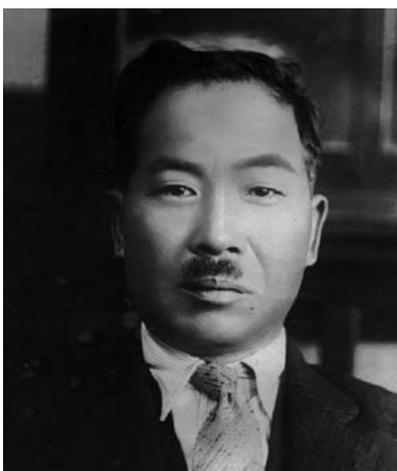


みやもと たけのすけ
宮本 武之輔(1892~1941)



土木技師。内務省土木局の技術官僚。和気郡興居島村(現、松山市)出身。父の代に生家が没落し、中学校への進学を諦め、商船のボーイになった。しかし、成績が優秀だったことを惜しんだ興居島の篤志家・宮田兵吉の援助などにより、勉学の道に戻り、私立錦城中学校(東京)に編入学した。ここでも成績抜群で第一高等学校(現、東京大学)に無試験で入学。異父兄・窪内石太郎の影響を受け工科のコースを歩む決心をし、東京帝国大学工科大学(現、東京大学)へ入学、大正6(1917)年、首席で卒業、内務省に入省した。

同年、利根川第二期改修事務所の安食工場勤務を経て、大正8(1919)年、内務省技師に任官。荒川放水路の小名木川なまき閘門せきもんの設計施工を命じられる。当時、新潟県信濃川下流域の洪水を防ぐため、大河津分水の建設が進められており、大正11(1922)年に通水。ところが、わずか5年後の昭和2(1927)年に、日本海に注ぐ水量を調節する自在堰が陥没したため、内務省は威信回復をかけ、武之輔を信濃川補修事務所主任として派遣した。武之輔は可動堰の設計と施工の陣頭指揮をとり、最新技術の鋼矢板工法を採用した可動堰を建設、わずか4年後の昭和6(1931)年に完成させ、越後平野を洪水から守り、民衆のために尽した。

昭和3(1928)年、コンクリートに関する研究で工学博士。また、関係各省の青年技術者を集めて大正9(1920)年に「日本工人倶楽部」を発足させ、技術院の創設を提唱し、現在の科学技術庁の母体を作った。昭和13(1938)年、内務省土木局から、内閣直属の中国占領地域に対する最高行政機関であった興亜院の技術部長に抜擢され、昭和16(1941)年には国の最高政策立案機関であった企画院の次長(官僚のトップ)に就任した。

略歴

明治25(1892)年1月5日	和気郡興居島村由良に生まれる。
大正6(1917)年7月	東京帝国大学工科大学土木工学科を首席で卒業。内務省に入省
大正8(1919)年	内務省技師に任官
大正9(1920)年12月	「日本工人倶楽部」を発足
大正12(1923)年9月	鉄筋コンクリート構造物の研究のため、欧米諸国(フランス、ドイツ、イギリス、アメリカ)を歴訪(～同14年3月)
昭和2(1927)年7月	信濃川大河津自在堰陥没事故を受け、可動堰建設の陣頭指揮をとる(同6年6月竣工)。
昭和3(1928)年1月	コンクリートに関する研究で工学博士号取得
昭和11(1936)年	『治水工学』を著す。
昭和12(1937)年9月	東京帝国大学教授(河川工学)を兼任する。
昭和13(1938)年12月	興亜院の技術部長に抜擢される。
昭和16(1941)年4月	企画院次長に就任
昭和16(1941)年12月24日	東京において悪性肺炎のため50歳で永眠

(写真提供：宮本武之輔を偲び顕彰する会)

〈参考文献〉

- ・宮本武之輔『科学の動員』 改造社 1941年
- ・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 人物』 愛媛県 1989年
- ・高崎哲郎『評伝工人(エンジニア)宮本武之輔の生涯』 ダイアモンド社 1998年
- ・社団法人北陸建設弘済会『久遠の人 宮本武之輔写真集』 社団法人北陸建設弘済会 1998年

〈主な収蔵資料〉…(P211, 75)

〈ゆかりのある場所〉…(P291, 110)